

はじめに

明治 11 年 (1878) 7 月 27 日、愛知県牧野村 (現名古屋市) で生を受けた松井石根は、陸軍士官学校、陸軍大学校を卒業⁽¹⁾。日露戦争に従軍した後、北京・上海などでの駐在を経て、ハルビン特務機関長、台湾軍司令官を勤め、陸軍大将となったが、昭和 10 年 (1935) 8 月、陸軍省内で統制派の永田鉄山軍務局長が皇道派青年将校に共感した相沢三郎中佐に惨殺されるという相沢事件が起きたため、軍の責任を感じた松井は現役を退いて予備役となった⁽²⁾。

中国駐在中、孫文の大亜細亜主義に強く共鳴した松井は、昭和 8 年 3 月に大亜細亜協会が設立されると、この運動に進んで参加し、予備役となった後は会長となり、亜細亜の独立解放など「興亜」の理想を実現すべく活動に邁進した。

しかし、昭和 12 年 8 月の第二次上海事変をきっかけに、中国通の松井は現役復帰を命ぜられ、8 月 15 日上海派遣軍司令官となって、9 月 29 日には苦難の末に大場鎮を占領、10 月 30 日には上海軍と第 10 軍とを統轄する中支那派遣軍司令官も兼官することとなったが、12 月 4 日朝香宮鳩彦中将が上海派遣軍司令官となったため、松井は兼任を解かれた。そしてその後南京攻略戦の指揮にあたり、12 月 10 日に総攻撃を開始、13 日に南京城は陥落し、17 日入城式が行われた。

12 月 22 日には上海に戻り、新政府樹立のための工作に奔走していたがうまく事は運ばず、翌年 2 月 23 日海路帰還した。帰国後の松井は傷病兵の慰問や全国の護国神社の参拝などを行い、退役軍人として英霊の冥福を祈り、遺族から依頼された墓碑銘の揮毫などを行った。その後松井は大森の官舎を引き払い、熱海伊豆山に移り住み、ここに興亜観音と名づけた観音像を建立し、日本・中国両国戦死者の菩提を弔った。そして松井は観音堂への参詣と朝夕の観音経の奉唱を欠かさず、あわせて全国の傷病兵の見舞いに努める一方、上海、南京、北支、中支などの戦跡を巡歴して慰霊を行うのと同時に、興亜総本部総裁・大日本興亜会総裁として「亜細亜の独立」のために奔走した。

敗戦後の松井はほとんど仏門のような生活であったが、昭和 20 年 10 月 19 日、A 級戦犯容疑となり、肺炎のために遅れて昭和 21 年 3 月 6 日巣鴨プリズンに入獄した。そして極東国際軍事裁判において死刑判決を受け、昭和 23 年 12 月 23 日、7 人のうち最初に処刑された。そのときの辞世は次のようである。

天地も人もうらみずひとすじに無畏を念じて安らけく逝く
 いきにえに尽くる命は惜かれど国に捧げて残りし身なれば
 世の人にのこさばやと思ふ言の葉は自他平等誠の心
 衆生皆姑息
 正氣払神州
 無為観音力

本稿では、このような松井石根によって建立された興亜観音が、いかなる思想により発案され製作されたのか、またどこにどのような経緯で建立されたのか、さらには興亜観音が人々にどのような影響を与えたのか明らかにしたいと思う。

1 南京戦後の慰霊

昭和 12 年 12 月 13 日、南京は陥落し、17 日に入場式が行われたが、翌 18 日に南京戦において亡くなった日本軍戦死者の慰霊祭が行われた。この慰霊祭について、東京裁判中山寧人参謀の宣誓口述書では以下のように述べられている⁽³⁾。

慰霊祭は初め”中国軍の戦没者も併せて祈り慰霊する様にせよ、これが日支和平の基調である”と、松井大将は参謀長に祭文其の他の準備をする様に命ぜられましたが、日時の余裕なく後日に譲ることとなりました。

松井は慰霊祭において日本軍および中国軍の戦死者をあわせて祀ることを考えていたが、師団長から異論が出て、日時の余裕もなかったため日本軍戦死者のみとし、「中支那方面陸海軍戦病歿将兵之霊標」の標柱が立てられ、南京城内故宮飛行場にて松井を祭主として慰霊祭が挙行された⁽⁴⁾。松井はすでにこの時点で日中両国の戦死者の慰霊を考えていたと言える。

また、山ノ井晃道「千人針と観音さま」に以下の叙述がされている⁽⁵⁾。

（昭和 12 年）十月の或る日の東京朝日新聞の夕刊は、上海戦の第一線に突撃部隊の勇名を馳せた我が鷹森部隊長の陣中生活の一面を報じてゐる。

鷹森部隊長は日頃、法然上人の教に深く帰依する人となり、死屍なまぐさき戦線に立つては、日毎に戦場の露と消える敵味方の勇士の冥福を祈つて、法然上人の一枚起請文を誦し又南無阿弥陀仏を唱へて亡き霊に回向してゐると云ふ。

鷹森部隊長とは、松井石根司令官配下の第 3 師団先遣隊連隊長の鷹森孝大佐のことである。彼もまた敵味方の戦死者供養を行っていることが注目される。

さらには、『朝日新聞』昭和 12 年 12 月 24 日には「無名戦士よ眠れ」と題する記事が写真とともに掲載されている。

抗日の世迷い言に乘せられたとは言え、敵兵も又、華と散つたのである、戦野に骸を横たへて風雨に曝された哀れな彼ら、が勇士達の目には大和魂の涙が浮かぶ、無名の敵戦士達よ眠れ！白木にすべる筆の運びも彼らを思へばこそ暫し洩る優しき心の墓標だ
そこには白木に「中国無名戦死者之墓 大日本軍建之」と墨で書かれた墓標が 4 柱横たえている。この記事から、敵兵を弔おうとしていたのは上官だけでなく、兵卒の間でも広く行われていたことがわかる。中国との戦争の際には日本軍による慰霊がしばしば行われ、新聞でもよくとりあげられた⁽⁶⁾。こうした慰霊のあり方がいつからどのような形で行われていたのか、従軍僧との関係も考慮して検討の余地があろう⁽⁷⁾。

昭和 13 年 2 月 7 日には南京で 50 日祭ともいふべき慰霊祭が挙行された。『松井石根大将陣

中日誌』には以下のように記されている。

午後慰霊祭ニ参列ス 予ハ去年南京入城翌日最初ノ慰霊祭ヲ自ラ祭主トシテ営ミ 今日亦五十日祭トモ云フヘキ此祭事ニ遭フモノナレト 曩ノモノハ戦勝ノ誇ト気分ニテ寧ロ忠霊ニ対シ悲哀ノ情少カリシモ 今日ハ只々悲哀其物ニ捉ハレ責任感ノ太ク胸中ニ迫ルヲ覚エタリ 蓋シ南京占領後ノ軍ノ諸不始末ト其後地方自治、政権工作等ノ進捗セサルニ起因スルモノナリ 仍テ式後参集各隊長ヲ集メ予ノ此所感ヲ披露シテ一般ノ戒飭ヲ促セリ

忠霊（病死共） 一八、〇〇〇余

斃馬 一二、〇〇〇頭

このとき慰霊されたのは、12月18日の慰霊祭で慰霊された「中支那方面陸海軍戦病歿将兵」の「忠魂」であって、中国人の戦死者の慰霊は行われていない。なおこの時に、「忠霊ニ対シ」「只々悲哀其物ニ捉ハレ責任感ノ太ク胸中ニ迫ルヲ覚エタリ」という感想を残しているのは、「南京占領後ノ軍ノ諸不始末」や「政権工作等ノ進捗」しないことによるためであったとしている。南京入城後、軍紀の乱れから一部兵士による略奪・強姦・暴行・殺人が行われたことに松井は心を痛めていたことが昭和12年12月20日の日記からもわかる。そのため、慰霊祭の際に「軍紀・風紀ノ振肅」「支那人輕侮思想ノ排除」といった訓示を与え、規律を正そうと努めている。

この日の夕、中国側の自治委員と会見し、新政権樹立を中国人の手に任せ、そのためには自らも協力を惜しまない旨を述べ、朝香宮軍司令官主催の夕食会では、「兎ニ角支那人ヲ懐カシメ 之ヲ可愛カリ憐ム丈ニテ足ルヲ以テ 各隊将兵ニ此気持ヲ持タシムル様希望」することを各隊長に述べている。中国通であった松井は慈悲の心をもって中国および中国人を見ていた。

そして翌2月8日朝、兵站病院を慰問したが、その際、日中両国僧侶参列の下、中国軍戦死者の慰霊祭を行っていることが注目される。上海派遣軍参謀副長『上村利通日記⁽⁶⁾』にはその様子が以下のように記されている。

松井軍司令官兵站病院見舞、挹江門脇ニ於テ支那軍戦死者ノ慰霊祭ヲ□□ニ取り行フ。

「敵ニハアレド亡キガラニ花ヲ手向クル武士道ノ情ケナリ」自治委員会ノ一行、日支ノ僧侶参列ス

この慰霊祭は、南京城北西の挹江門脇で行っていることから、昭和12年12月12日日本軍南京侵攻の際、中国軍兵士が挹江門から脱出しようとして混乱し、約1000名の中国軍兵士が死亡した挹江門事件の慰霊であろう。

さらに2月14日には、上海郊外の呉淞元砲台跡に計画中の聖戦記念塔の地鎮祭を行っている。この地は最初の陸上作戦で多くの日本軍死者を出した激戦地であり、そこに記念塔が建設されることになったのである。また同日、上海東西本願寺に祀られている戦病死者の英霊に参拝している。『松井石根大将陣中日誌』によれば、西本願寺に収容されている遺骨総計は約2万1千で、すでに4千余を還送し、近くさらに6千を還送する予定だという。また東本願寺の分は総計2千余で、すでに6百余を還送し、近くさらに3百を還送する予定だという。これら多数の戦病死者の遺骨を目の当たりにし、松井は自身の責任の重大さを痛感し、「痛恨ノ至リ」と記している。

また2月18日には、大場鎮の戦闘で亡くなった日本軍戦死者慰霊のため建設することにな

った表忠塔の題字およびその下に刻記するための詩を書し、それは以下のものであった。

大場鎮陥落即吟

悪戦力闘三閏月

包瘡拔壘斃不已

神哉敵陣旭旗翻

欲餞忠靈幽寂裏

こうした納骨施設を伴った表忠塔・忠霊塔の類は、日露戦争以後、日本軍が海外で戦闘の後、英霊を弔うため、その地に少なからず建立された。遺骨の大部分は郷里に還送されたが、残った遺灰は付近の清浄な地に埋葬され、納骨祠を建立して遺灰は奉安された⁽⁹⁾。

以上、南京戦後、松井の戦死者慰霊に関する記事を抜き出してみた。ここでわかることは、松井は自ら慰霊祭の祭主を務めるなど、積極的に慰霊を行っており、日本軍だけでなく中国人の戦死者慰霊も行っていることである。

松井は2月23日に門司港に到着後、翌朝赤間神宮および乃木神社に参拝しているが、松井は同じ大将として乃木希典を非常に尊敬していた。乃木は日露戦争旅順要塞攻撃で亡くなったロシア軍慰霊のために、明治41年6月10日日露両国の代表者が参列して行われた「旅順陣歿露軍将卒之碑」の除幕式に参加したり、旅順要塞攻撃の際に殉じた日本陸海軍将校下士卒の遺骨残灰の一部を合葬して英霊を慰めるために、明治41年3月31日に竣工された旅順白玉山納骨祠や、日本軍戦死者の英霊を慰めその威烈を千載に伝えるために、明治42年11月28日に竣工式が行われた旅順表忠塔にも深く関わっていることから、慰霊に関してこうした乃木のあり方に倣ったのであろう⁽¹⁰⁾。「旅順陣歿露軍将卒之碑」建立の意図は、戦時中は「仇敵」だったが戦後は「友邦者」となったのであり、自国に忠義を尽くし戦歿した「英霊」が存するのであるからもちろん敵国にも戦歿した「英霊」がおり、その遺屍が「無頼土民の徒」に冒瀆されないように改葬して弔い、その義烈を千載に伝えようとしたものであったとされている⁽¹¹⁾。こうした慰霊のあり方は、武士道と結びついて醸成され、さらには松井石根が強調した「怨親平等」思想に基づいた興亜観音建立へとつながっていく。

2 興亜観音の建立

熱海伊豆山に建立された興亜観音の経緯については、田中正明編『松井石根大将の陣中日誌』に紹介される熱海伊豆山温泉旅館塗々園主人古島安二氏の手記「興亜観音建立由来記」に詳しいので、それをまとめる形で紹介したい。

松井石根は、帰還した昭和13年5月塗々園に滞在し、古島に伊豆山で余生を送りたいこと、それに相応しき住宅を作りたいことを相談し、古島はその手伝いをした。住宅が一段落すると、松井は「出征の際某氏から一体の観音像を寄進され、陣中常に奉戴して来たが、自分の家は神道であってこれを安置する仏壇がないので聊か困っているのだが……」と相談した。それに対して古島は観音様をおまつりして部下戦没将士二万余の英霊を弔われたらどうかと提案したと

ころ、松井は即座に賛成した。さらに、観音堂の建立だけでは平凡であるので、上海上陸以来、南京入場に至るまでの各戦場の土を採り、これで露座の陶製の観音像を造ってはと進言したところ、松井はそれに賛成して「死んだら敵も味方もない、よろしく一緒にまつろうではないか」と言い、戦争の犠牲者の血肉によってできた観音像は「興亜観音」と命名し奉るほかないとの松井の固い意思により、それと決まった。

興亜観音の原型の製作は、当時愛知県常滑の陶工柴山清風氏が陶製の観音像を焼成し、これを各方面に頒布していることを聞き、名古屋へ出向き同氏に原型を依頼して快諾を得た。土は畑軍司令官にお願いして「戦場の土」を十樽ほど送って頂いたのを常滑へ送荷するとともに、なお完璧を期する意味で彫塑家小倉右一郎氏に原型の修正を依頼した。かくして両氏合作の塑像が出来、この焼成は常滑の杉江製陶所が引受けて下さった。

以上、「興亜観音建立由来記」の概略であるが、観音像建立計画は古島によってたてられ、実際に建立に向けて奔走していたのも古島であったことがわかる。

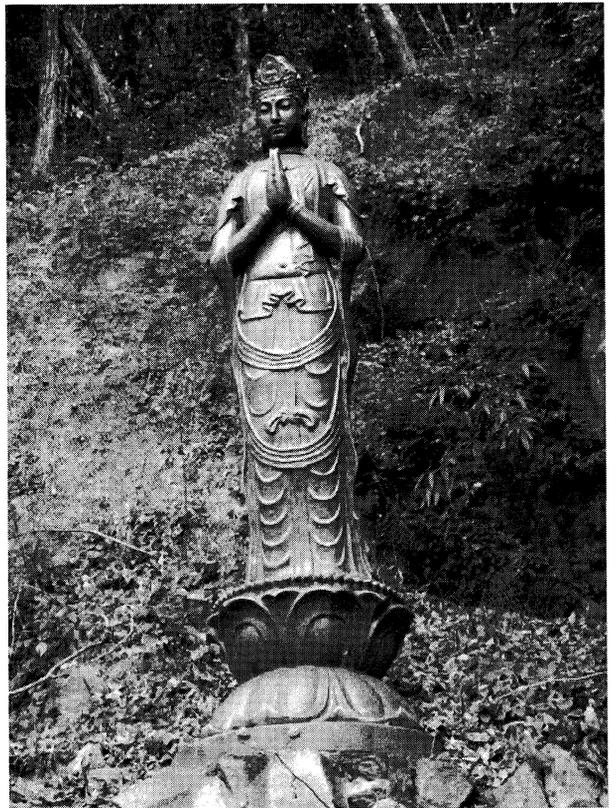
本尊の観音は瀬戸の陶工師加藤春二、露座の観音は常滑の柴山清風作で、内陣右には「支那事変日本戦没者霊位」、左には「支那事変中華戦没者霊位」を安置し、開眼式は昭和15年2月24日、芝増上寺大島徹水僧正を導師として行われた。加藤は一人息子が日中戦争の際戦死し、松井の念願に共鳴して合掌印の観音像と同じ姿のものを二尺に謹作したので、以下、露座の興亜観音を中心に建立の経緯について見ていく。

『朝日新聞』昭和14年3月29日「悲願一千観音像—燃ゆる信仰を一本の篋に一尊し六年無償の奉仕」と題する記事に以下の記述がある。

一本の篋に燃ゆる信仰と沸きあがる製作慾をこめて観音像を刻むこと六年、しかも全霊を傾けたその観音像を乞はるるまゝに一年百體づつ無償で同好の士に頒ち仏門の興隆に情熱を捧げる

(中略)

昭和九年一本の篋を手にして齋戒沐浴二ヶ月間、全生命を打ち込んで謹作したのが法隆寺夢殿の国宝救世観音菩薩の陶像であつた、以来仕事の余暇に毎年百體づつ十ヶ年一千體の



熱海の興亜観音

観音像を製作して広く無償で与へ信仰の世界に導くことを決心しすでに五百體の救世観音像を製作した

(中略)

支那事変が勃発するや氏は知多郡最高の本宮山頂に六尺余の護国観音建立を発願し精進を続けてゐるほかすでに海上に働く人達の安全を祈願するため八尺余の一葉観音像を謹作して鳥羽湾頭に建立した、また異境にあつて皇国のため奮闘する皇軍将士の武運長久を祈るため一寸足らずの「弾除け観音」を謹作して松井前中支最高指揮官、寺内前北支最高指揮官はじめ多数の将兵に贈り第一線からの感謝状が山積してゐる、目下某將軍の依頼を受けて一丈余の観音陶像を建立することになり原型の製作に努めてゐる

柴山清風は常滑陶器学校卒業後、人形、火鉢、花瓶などの原型製作を行っていたが、人間は何をするために生きているかと考え出してから神経衰弱に陥り、そうしていたところふとしたことから『観音菩薩研究』という本を読み、悩んでいる人たちが信仰によって救おうと観音像建立を決意したという⁽¹²⁾。そして昭和9年2月から観音像一千体謹作の発願を起し、篤信者に対して無料で分けていた。その一方、鳥羽市三ツ島(平島)の一葉観音(波頭観音)や常滑市樽水本宮山護国観音なども製作している⁽¹³⁾。

そして注目されるのが弾除け観音である。『朝日新聞』静岡版昭和14年7月4日「松井大将の熱願 五族協和を表徴! 熱海に建つ” 興亜観音”」記事中でも、

”興亜観音”の製作を依頼された愛知県知多郡常滑町在住陶工柴山清風氏は大将がかねて戦地にある際部下将兵に小さい弾よけ観音像を贈ったことが機縁となったもので昨年十二月大将から観音像製作を委嘱されるや大いに感激、心血を注いで製作に当り六月末約一尺の粘土像の試作を完成、三十日には松井大将来名して下見をし、愈近く本製作に着手することになった



弾除け観音(柴山寛氏蔵)

と記されており、興亜観音の製作者として清風が選ばれたのは、戦地の部隊に弾除け観音を贈っていたことが機縁となった。弾除け観音は3匁ほどの陶製で、兵士たちは千人針の腹巻きの中に弾除け観音を潜ませていたという⁽¹⁴⁾。

戦地に赴いた兵士たちの間では、観音菩薩に対する信仰が広まっていたようである。これは『観音経』の内容と関係している。

或被悪人逐 墮落金剛山 念彼観音力 不能損一毛 或值怨賊繞 各執刀加害 念彼観音力 咸即起慈心 或遭王難苦 臨刑欲寿終 念彼観音力 刀尋段段壞
(中略)

諍訟経官処 怖畏軍陣中 念彼観音力 衆怨悉退散

悪人に追われて金剛山から落ちたとしても、観音の力を念じたなら、髪の毛一本も損なうことはない。心に怨みを抱く悪い賊に取り囲まれて斬り殺されそうになったとしても、観音の力を念じたなら、彼らは慈悲の心を起こすだろう。悪い王の災難に遭い苦しめられて処刑されそうになったとしても、観音の力を念じたなら、刀は段々に折れてしまうだろう。争いの際に戦いの中で恐怖におかれても、観音の力を念じたなら、衆生の怨みはことごとく退散するだろう。

観世音菩薩は、私たちが遭遇するあらゆる苦難に際し、その偉大なる慈悲の力を信じて観音の名を唱えれば必ずや救ってくれるとされる。そのため、出征に際し、観音のお守りを身につけていたり、『観音経』を唱えることがあった⁽¹⁵⁾。こうしたことから、松井の建立する仏像には観音菩薩がふさわしかったことがわかる。

興亜観音の高さは八尺、台座の高さ二尺五寸、陶製合掌像でこれは古来の観音像の型を破って、伸ばした五本の指は五族協和、合せた一つの掌は東西、西洋の一致を表して製作された。これだけ大きい陶像を製作するのは非常に困難であるという⁽¹⁶⁾。興亜観音が完成するまで、松井は数回にわたって清風のもとを訪れた。昭和15年2月3日に像は完成し、名古屋鉄道および国鉄の無料奉仕で熱海まで輸送された。

熱海市伊豆山鳴沢に建立された興亜観音の開眼供養法会は、昭和15年2月24日、願主松井石根、導師芝増上寺大島貫首をもって挙行された。

「建立縁起」には次のように記されている。

支那事変は友隣相撃ちて莫大の生命を喪滅す。実に千歳の悲惨事なり。然りと雖、是所謂東亞民族救済の聖戦たり。惟ふに此の犠牲たるや身を殺して大慈を布く無畏の勇、慈悲の行、真に興亜の礎たらんとする意に出でたるものなり。予大命を拝して江南の野に転戦し、亡ふ所の生霊算なし。洵に痛惜の至りに堪へず。茲に此等の霊を弔ふ為に、彼我の戦血に染みたる江南地方各戦場の土を獲り、施無畏者慈眼視衆生の観音菩薩の像を建立し、此の功德を以って永く怨親平等に回向し、諸人と俱に彼の観音力を念じ、東亜の大光明を仰がん事を祈る。

因に古島安二氏其他幾多同感の人士併に熱海市各方面の熱心な協力を感謝す。

紀元二千六百年二月

願主 陸軍大将 松井石根

また、『朝日新聞』静岡版昭和15年2月25日「冥福を祈つて」願主松井大将は語るには、「興亜観音開眼式の二十四日朝、松井大将は牧少将を通じて観音建設の意向を次の如く語った」として、

興亜の大光明を仰ぎ度い一心からこの大業のために尊い犠牲となつた皇軍将士とこれも同じ大業のためたふれた支那の兵士の霊を併せて弔ひ度いのが自分の念願で皇軍将士は靖国の神と祀られるのであるが皇道精神から見れば自分が観音像を建ててその冥福を祈る気持もそれに合致してゐると信じてゐる、本籍迄熱海へ移した自分はここで幾多の英

霊を慰めながら余生を送り度いと思ふ
と記されている。

「建立縁起」では、「怨親平等」が明確に記されており、観音菩薩の力によって亡くなった人々の菩提を弔い、さらに東亜民族の救済を念じている。

本堂の興亜観音堂の基石の下には、松井の写経とともにある女性の般若心経一千巻の写経が納められた。『朝日新聞』東京本社版昭和 16 年 9 月 11 日には「英霊に献ぐる秘願 畢生の写経千巻—興亜観音に香る一女性の心血—」の記事が掲載されている。これによると、東京に住む女性が、亡き父の三界万霊の冥福を祈る写経を引き継ぎ、英霊の供養にと般若心経一千巻の写経をして十巻に表装し、総持寺貫首伊藤道海禅師らの題字を添えて松井に贈り、松井の手で納められたのであった。そして、「興亜の英霊に捧げる心清い—婦人の”写経秘話”が御堂に杖ひく人々の語り草となつてゐる」と記されている。

興亜観音の造立は、戦死者を悼む多くの人々の心を動かしていった。

3. 各地に建立された興亜観音

興亜観音は熱海のものがあるが、それだけではなかった。新聞記事で興亜観音について報道されるや、怨親平等思想に共鳴した僧侶が自らの寺院にも興亜観音を建立したいとの希望を松井に申し出、松井はそれに対して快諾して、他所においても興亜観音が建立されることになった。

「第二号」の興亜観音は三重県尾鷲市の曹洞宗寺院金剛寺境内に建立された。金剛寺 21 世の鬼頭観梁和尚は、熱海に興亜観音が建立されたことを知り、尾鷲にも建てたいと松井大将に懇願し、認められたのであった⁽¹⁷⁾。

『伊勢新聞』昭和 16 年 8 月 11 日「興亜観音像除幕式 尾鷲町金剛寺境内で営む」には以下のように記されている。

北牟婁郡尾鷲町金剛寺住職鬼頭氏の発起で地元有志の浄財を得て同寺境内に建立を急ぎつゝあつた『興亜観音像』は今次聖戦に幾多武勲を樹て興亜の礎石として散つた護国の忠霊を永久に慰めるべく岡崎市の名工宇野眞太郎氏に依頼中のところこんど見事に彫刻を終り安置したので九日の吉日をとし午後一時から大本山永平寺貫首高階禅師、徳川好敏中将臨席、松井石根大将、小笠原長生子の祝辞代読、濱地文平代議士ほか町村長関係来賓百余名を招き荘厳な除幕の式を挙行、午後二時盛会裡に終了した。式後徳川中将の時局講演が行はれた

柴山清風以外によって製作された興亜観音は、金剛寺の興亜観音だけである。また石仏であることも他の興亜観音とは異なっている。胸の前で両手を合わせる姿や衣文等、熱海のものと同じになるように製作されたようである。

台座銘には以下の「興亜観音建立縁起」が記されている。

支那事变戦没者追悼供養の為観音大士を建立す、願くはこの功德を以て普く怨親平等に回

向し、日華両民族俱に妙智力に依怙して速やかに東亜の大光明を仰かんことを祈る、
昭和十六年七月吉日 金剛廿一世 観梁叟

「辛巳端午

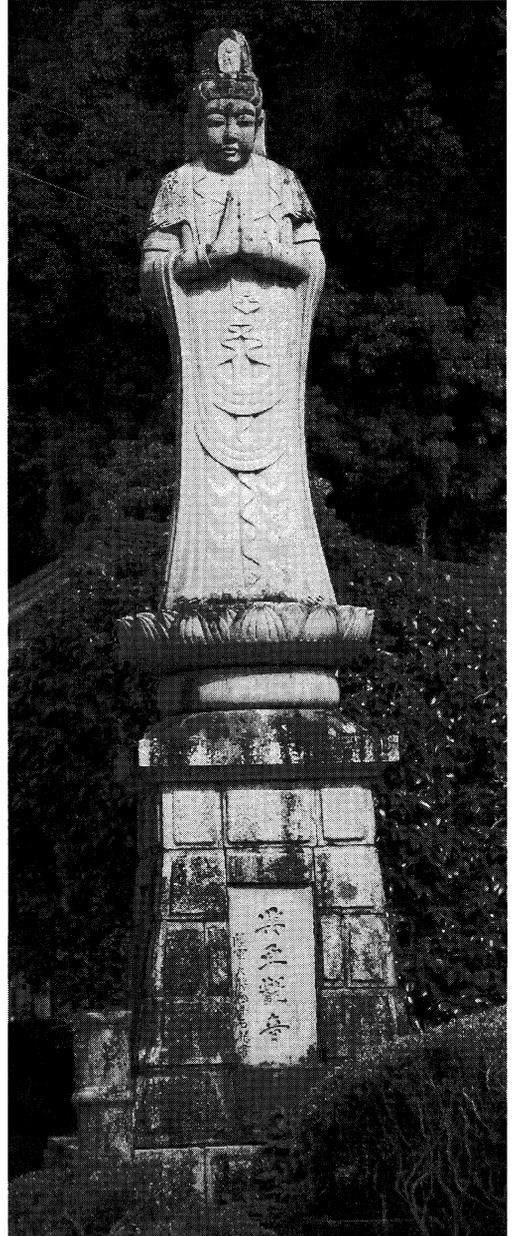
怨親平等

楮民誼」

ここでも戦争で亡くなった日中両国の戦没者の供養として「怨親平等」が強調され、観音菩薩の力によって大東亜建設がなされるよう祈願している。「怨親平等」と揮毫した楮民誼は、民国 29 年（1940）3 月、南京国民政府の行政院副院長兼外交部長となり、日本との外交折衝を主に担当し、同年 12 月駐日大使となった人物である。年月からして、駐日大使として日本に赴任している際に依頼されて揮毫したと思われる⁽¹⁸⁾。

金剛寺の興亜観音が石仏となったことについての詳細はよくわからないが、岡崎は石工品で有名であるので、石仏で興亜観音を作るようになった際、金剛寺と関係のあった宇野眞太郎に依頼したのであろう。金剛寺境内には昭和 10 年 5 月 27 日の「日露戦勝三十周記念日」に東郷平八郎の筆による「妙智力碑」が建立され、そのときの石工が宇野眞太郎であったことから、今回も氏に彫像を依頼したのであろうが、松井にどのように連絡をとったのかは不明である。

開眼供養の際には、松井はおそらくは体調が芳しくなかったため参列せず祝辞を寄せている。当日は、昭和 13 年 4 月 10 日、決死的な爆撃行の中で弾丸数十発を浴び、左腕左脚を負傷しながらも、操縦桿にハンカチを巻き、口でくわえて基地に帰還し、15 日に亡くなった尾鷲町出身の福山米助大尉の娘洋子ちゃんが除幕を行った⁽¹⁹⁾。そして、北牟婁郡内戦没将兵遺族ら 200 余名が参列し、郡内 32 ヶ寺の僧侶奉仕のもと、永平寺貫首高階禅師の開眼供養があり、岡町長以下来賓の祝辞、武運長久祈願ののち、日支両軍戦歿将兵英霊の追悼が行われるなど、盛大な儀式であった。



尾鷲市金剛寺の興亜観音

ついで富山県入善町の浄土真宗養照寺に興亜観音が建立された⁽²⁰⁾。熱海に興亜観音が建立されたことを知った養照寺住職藤齋常倫氏は、昭和 15 年 3 月 13 日に興亜観音を訪れ、その際、偶然に松井の姿を拝することができ感動したことを記している。そして翌年 1 月 11 日再び参拝し、同時に松井に対して、興亜観音の分身を日本海に臨んで養照寺内に建立したい旨申し出ると、松井は快諾して製作者である柴山清風を紹介された。そして松井は像下の題字となる「興亜観音」をすぐに揮毫して養照寺に送った。興亜観音建立委員長は町長の米澤元貞氏が務めて式典の準備が行われた。清風は松井からの紹介により観音像の製作に取りかかり、昭和 17 年 1 月 10 日、養照寺に像が到着し、昭和 17 年 5 月 3 日、開眼供養が行われた。

観音像の右には楮民誼によって「怨親平等」と揮毫された石碑が建てられ、開眼供養法要には祝辞を寄せた。そしてその碑には、菊池寛が選した選した碑文が刻まれた。その文面は以下のとおりである。

それ観世音は、衆生に無畏を施すゆゑに施無畏者の名あり、大慈大悲の心篤きを以て大悲聖者の名あり、世界を救済するの故に救世大士とも称せられたまふ。思ふに興亜の義戦は万邦に無畏を施すにあり。興亜の心は万民に慈悲を加ふるにあり。興亜の道は虐げられたる民族を救済するにあり。しかも観音菩薩の救済は無限にして、普く一人も漏れることなしと聴く。まことや大東亜聖戦の意義は観世音の心願を東亜に実現するにある。今養照寺の寺域に立ちたまふ聖姿を拝する人は、何人も興亜の戦に散り行きし人々に対し、敵味方無差別の菩提を弔ふと共に、戦争の悲願に、恩讐一如万民共栄、施無畏の理想世界の一日も早く建立せられんことを念願すべきであらう。

昭和十七年三月二十六日

菊池寛

興亜観音に対して、敵味方の差別なく菩提を弔うのと同時に、観音菩薩の力によって東亜の民族の共栄が実現されることを祈願している。また、門前の標石には牧次郎少将の筆による「興亜観音」の文字が刻まれた⁽²¹⁾。牧次郎は杭州湾上陸の際の勇将と讃えられ、帰還後は知恩院で得度し釋相圖と名乗ったが、法衣姿で戦場を弔い、激戦地の霊土霊骨を将来して増上寺に安置していたが、その一部を観音像の台座内に安置したのであった。そして、東本願寺句佛上人の「栄誉無上護国の魂に風薫る」の句碑も建てられた。

開眼供養が行われた昭和 17 年 5 月 3 日には、松井は病気のため参加できず祝辞を寄せたが、大谷派宗務総長信正院瑩潤連枝導師のもと開眼供養法会が行われ、僧侶三十数名による勤行以下、盛大な式となった。

ついで奈良県桜井市蓮台寺に興亜観音が建立された⁽²²⁾。蓮台寺 21 世性誉寛樹和尚が、熱海に興亜観音が建立されたことを知り、自らが提唱していた興亜合掌会の求めるものは興亜観音像の建立から始まると思ひ立ったことによるものである。性誉寛樹は知人織田陳蔵氏が柴山清風と旧知の由を知り、同じ仏像製作を依頼したところ、大将の命あるならば製作するとのことだったので、松井と親交の厚い大島徹水増上寺法主猊下を介して、昭和 16 年 1 月 5 日熱海の松井邸を訪ね、興亜会の主旨を述べ、同じ土をにより製作した観音像を蓮台寺境内に建立したいと懇願した。松井はこれに同意して自ら発願主となり、柴山清風に高さ 2.42 寸の興亜観音像製作を依頼したのであった。

そして、昭和 16 年 11 月 3 日、大島大僧正を導師に迎えて地鎮祭が行われた。その地下には県下の小学校児童による名号石、奈良安井崇徳寺住職の発起の写経石が納められ、基礎石には天平年間吉備真備によって建立されたとされる心楽寺の礎石を四切にして使用された。また、観音像の横には「興亜観音 発願 陸軍大将松井石根」と刻んだ標石も建てられた。翌 17 年 9 月に工事を終え、昭和 18 年 3 月 27 日松井夫妻を迎え、大島大僧正を導師として開眼大法要が行われた。その発願文は以下のとおりである。

支那事変は友隣相撃ちて莫大の生命を喪滅す。実に千載の悲惨事なり、然りと雖も是れ所謂東亜民族救済の聖戦にして、其犠牲たるや身を殺して大慈を布く無畏の勇慈悲の行以て興亜の礎

たらむとするの意に因るものなり。予曩に大命を拝して江南の地に展戦し喪ふ所の英靈算なし。洵に痛恨の情に堪えず、茲に此等英靈を弔う為彼我の戦場たりし江南地方各地の土塊を採り来りて施無畏者慈眼視衆生の観世音菩薩の像を建立し、此功德を以て永く々々怨親平等に回向し、諸人と共に彼の観音力を念し東亜の大光明を仰かむことを祈る。今や大東亜の戦跡は遠く南洋の彼方に及び戦争の範囲も亦支那事変の比にあらず。冀くは亜細亜古来の観音精神を洽く大東亜の諸民族に悟了せしめて大東亜聖戦の完遂に貢献せむことを以て発願の辞となす。

昭和十八年三月二十七日

陸軍大将 松井石根（花押）

当日は浄土宗総本山知恩院式衆をはじめ県下各寺院の僧侶、京都師団長代理相葉大佐、中华民国大使代理倪孚林氏、奈良県知事代理坂田聖地顕揚課技師、大福・香具山国民学校児童、戦病歿軍人遺家族らが参列する盛大な法会となった。

興亜観音として露座に建立されたのは、熱海、尾鷲、入善、桜井の 4 体であった。興亜観音は熱海に建立された後、それを報道で知った人々が、「怨親平等」の思想に心を動かされ、分身を地元にもとの思いで松井大将に懇願し、仏教界、政界、軍、地域が一体となって運動した結果であった。そこには亡くなった人の菩提を弔うのと同時に、「興亜」を観音に祈願し、戦争を勝利に導いてもらいたいとの意志もあった。



桜井市蓮台寺の興亜観音

その他、外国に贈られた興亜観音もある。『読売新聞』昭和16年6月25日「汪氏へ興亜観音仏一けふ松井大将が沼津駅頭で一」という記事には、6月25日静岡県沼津駅で、松井が南京国民政府汪兆銘主席に約8寸の興亜観音像を贈ることが記されている。贈られる観音像は、熱海の興亜観音像を型取った清風の製作によるものであった。贈ることになった理由については、

松井石根大将は汪主席とは第二次支那革命以来すでに廿余年の知己で廿三日夜帝国ホテルで催された汪氏歓迎晩餐会に出席した時興亜の大道を語り合つた際、談たまたま興亜観音に及び恩讐を超越して日華両勇士の霊を祈る大慈悲心に汪主席は感激、松井大将から贈ることになつたものである

とされている。東亜新秩序建設のために6月17日上京した汪兆銘は、近衛文麿首相、松岡洋右外相らと会談し、帰路特急つばめ号の停車した沼津駅で松井から興亜観音のミニチュアを贈られた⁽²³⁾。これも清風作で、ミニチュア興亜観音は国内外に数点贈られたようである。

上海玉佛寺にも興亜観音が贈られた。『朝日新聞』昭和18年10月26日「けふ興亜観音の恭送法要」記事に以下のようにある。

来る十一月三日から上海玉佛寺で開かれる大東亜戦争戦没者慰霊法要の本尊仏として日華将兵の冥福を祈るため中国に渡ることになつた既報松井石根大将発願の興亜観音聖像恭送法要は、大日本仏教会の主催で二十六日午前十一時から芝増上寺大殿で営まれた玉佛寺に贈られた興亜観音もおそらくは清風作のミニチュア興亜観音だろう。また、昭和18年にはタイ国ピブン首相に献上された興亜観音もある⁽²⁴⁾。

興亜観音は新聞で紹介されるだけでなく、浪曲にもなり、全国各地に伝えられた。『朝日新聞』昭和19年3月24日の記事は以下のようである。

松井石根大将が発願建立した熱海市伊豆山鳴沢の興亜観音の縁起が興亜総本部の肝煎で今度浪曲に編まれ新篇「興亜観音」が出来上つた、同大将の中支戦跡の慰霊行における坂田上等兵母妹の挿話なども織り交ぜ日支両国将兵の忠魂を祀るまでを物語風に描写したもので四月二十四日熱海市を皮切りに木村若衛が全国を行脚することになつた

こうした興亜観音も、戦争が激しくなると建立されることはなくなり、新聞記事にも見られなくなった。そして、敗戦、さらには松井の処刑という事態の急展開に直面することになつたのである。

おわりに

以上、興亜観音建立の経緯について紹介した。これまでは熱海の興亜観音にのみ注目が集まり、他の興亜観音についてはほとんど忘れられていたと言ってよい。その背景には、松井石根が戦犯として処刑されたり、「興亜」という語が否定されたことにより、興亜観音も忌避されるようになったということもあろう。

松井が興亜観音を建立したことに對して、偽善にすぎないとの見方もある。しかし、松井の

人となりを見れば、そのような推測はあたらないことがわかる。松井は尊敬する乃木希典に倣い、武士道に基づいて、勇敢に戦った敵将もたたえて祀ったのである。そしてそこには仏教思想の影響もあり、「怨親平等」を唱えるようになったと考えられる。彼の晩年はひたすら戦死者の冥福を祈ることに費やされたのである。

戦地に赴いた兵士の間では、弾除け観音や観音のお守りを身につけたりするなど、観音信仰が広がっていた。また、従軍僧や兵士たちによる敵味方のない戦死者の慰霊も数多く行われた。こうしたことを受けて、松井は帰還後、興亜観音を建立し、毎日参拝して観音経を唱えた。

従軍の後、出家した兵士も少なくない。戦争という狂気に翻弄され、生き延びた者がせめてもの思いとしてできる行為が、死者への慰霊である。そこには古代以来続く日本人の霊魂観を基層として、時代とともに変わる慰霊のあり方がある。私は、興亜観音の前に立つとき、歴史に翻弄された多くの先人たちの姿を思い起こさずにはいられない。

-
- (1) 名古屋駅南の椿神社境内には、松井の筆による「武五郎直行君頌徳碑」と、松井が南京入城後に作った詩が刻まれた碑が建てられている。なおこの碑は、戦後中村公園近くの池に投げ捨てられたが、再び建てられたという。
 - (2) 松井石根の事績に関しては、田中正明編『松井石根大将の陣中日誌』（芙蓉書房、1985年）、早瀬利之『将軍の真実 南京事件—松井石根人物伝』（光人社、1999年）などに詳しく、本稿執筆にあたって大変参考にさせていただいた。
 - (3) 南京戦史編集委員会編『南京戦史資料集Ⅱ』（偕行社、1993年）。
 - (4) このときの様子は、昭和13年東宝映画文化映画部作成の戦線後方記録映画『南京』として編集され、DVD『南京 戦線後方記録映画』（コニービデオ、2004年）で見ることができる。松井は長文にわたる祭文を読み上げ、さらに玉串奉奠の後、誰よりも長く黙祷している。
 - (5) 山ノ井晃道「千人針と観音さま」（『観音世界』1-10、1937年）。
 - (6) 張石「日中戦争における旧日本軍と中国軍隊の「敵の慰霊」について—一日中の死生観をめぐって—」（『東アジア共生モデルの構築と異文化研究—文化交流とナショナリズムの交錯—』（法政大学国際日本学研究センター、2006年）では、1937年3月から1945年8月までの『朝日新聞』に15件の日本軍の「敵の慰霊」が掲載されたとする。
 - (7) 佐藤正導『日中戦争・ある若き従軍僧の手記』（日本アルミット株式会社、1992年）では、佐藤氏が河北省で慰霊祭や宣撫活動を行っていた様子が具体的に書かれている。「死んだ人達は皆んな仏であり、敵も味方ありません。私は中国の兵士も日本の兵士も、わけへだてなく供養をしまわっております。」との叙述は、従軍僧のあり方をよく示している。こうした仏教の「怨親平等」思想が、松井の興亜観音構想に影響を与えたと思われる。
 - (8) 南京戦史編集委員会編『南京戦史資料集Ⅱ』（偕行社、1993年）。
 - (9) 大原康男『忠魂碑の研究』（暁書房、1984年）。
 - (10) 大濱徹也『乃木希典』（河出書房新社、1988年）によれば、乃木は自戒の思いを込めて武士道の本質を広く伝えるのに尽力し、常に戦死者や傷病兵を意識していたという。

- (11) 藤田大誠「近代日本における「怨親平等」観の系譜」(『明治聖徳記念学会紀要』復刊第44号、2007年)。
- (12) 網野宥俊「松井大将発願の観音像謹作者柴山清風師を訪ふの記」(『観音世界』3-9、1939年)に観音像製作の経緯がまとめられている。
- (13) 護国観音は戦時中に何者かによって破壊された。
- (14) 柴山寛氏談。
- (15) 小笠原長生「弾丸受給ふ観世音」(『観音世界』1-7、1937年)、平野龍之介「お守と千人針の加護—上海事変に参加の勇士から壮烈なりし戦闘談を聴く—」(『観音世界』1-7、1937年)、矢吹慶輝「時局と信仰—観音菩薩の信仰を中心として—」(『観音世界』1-8、1937年)、山ノ井晃道「千人針と観音さま」(『観音世界』1-10、1937年)などに兵士たちの観音信仰を見ることができる。
- (16) 柴山寛氏談。
- (17) 伊藤良編『ふるさとの石造物』(尾鷲市郷土館友の会、1980年)。
- (18) 褚民誼は後に昭和天皇から勲一等旭日大綬章を授与されるが、終戦を迎えると広州で軟禁され、江蘇省の監獄に入れられた。そして翌民国35年(1946)漢奸として死刑を宣告され、8月23日蘇州の監獄で処刑された。
- (19) 福山大尉も金剛寺に「制空院豪胆忠節居士」として葬られている。
- (20) 建立の経緯については、『興亜観音』(養照寺、出版年未詳)に詳しい。
- (21) 戦後は「興亜観音」の文字が「救世観音」に改められた。
- (22) 石崎正雄・吉井宗平『寶林山蓮臺寺』(蓮台寺寺史編纂委員会、1983年)に建立の経緯が記されている。
- (23) 汪兆銘は1944年11月10日名古屋で亡くなり、遺体は南京郊外の梅花山に埋葬されたが、墓を暴かれることを恐れて5トンの鉄鋼粉を混ぜたコンクリートを流し込んで棺が覆われたが、1946年1月15日、国民党軍は「漢奸」だとして墓の外壁を爆破して棺を取り出し、遺体を灰にした後、野原に捨てた。さらには1994年、墓のあった場所に後ろ手に縛られ、孫文を葬る中山陵に向けて跪く汪兆銘の像が造られた。
- (24) 清風の陶房ホームページ <http://www7b.biglobe.ne.jp/~kannon/> に写真が掲載されており、高さ1.1mとされる。

付記 本稿執筆にあたり、熱海興亜観音伊丹妙浄師、金剛寺、養照寺、蓮台寺、常滑市柴山寛氏、岡崎市宇野欽也氏、朝日新聞東京本社辻直美氏に大変お世話になりました。ここに記して感謝いたします。

(やまだ ゆうじ 三重大学人文学部)